

詩僧齊己と鄭谷の關係について

福井 敏

現在、唐末の詩僧・齊己（八六四？—九四三？）と唐末の進士・鄭谷（八五一？—九一〇？）との關係は、「一字師」といわれる故事によつて作詩上の師弟關係にあつたと考えられている。このことを裏付ける史料として、『五代史補』卷三及び『十国春秋』卷一〇三は「早梅」詩（『白蓮集』卷六）を、また『唐詩紀事』卷七五や『唐才子傳』卷九などは「寄鄭谷郎中」詩（『白蓮集』卷二）をそれぞれ取りあげて、その詩にまつわる鄭谷と齊己の師弟關係を述べる。また、二人に深いつながりがあることは、齊己の詩集である『白蓮集』中に鄭谷のことを詠む詩が二十首近くあることから明らかである。

このように、さまざまな史料が齊己と鄭谷の師弟關係を述べるにも関わらず、鄭谷が齊己に贈つた詩は、完全な形としては一首ものこされていない。これは、鄭谷の詩集『雲臺編』の成立が自序にあるように乾寧年間（八九四—八九八）という鄭谷の生涯のなかでも比較的早い時期であつたことが関連している。二者の關係が深まつたのは、鄭谷が都官郎中を辞して彼の故郷・宜春（江西省宜春県）の仰山に隱居した後のことであり、齊己との応酬詩が残っているとすれば、散佚したとされる『宜陽集』にあると考えられるからである。

齊己が僧となつたのは、『宋高僧傳』卷三〇や『唐才子傳』の齊己伝が述べるように、大瀉山寺においてである。その後のことに

ついて『宋高僧傳』には、徳山、葉山、鹿門、護国といった禪林を渡り歩いたことが記されている。現在、齊己を徳山宣鑑の法嗣とするもの（『禪学大辞典』）があるが、宣鑑の没年が感通六年（八六五）であることから考えても無理のある説である。むしろ、出家の記事などをみてもわかるように、齊己は南宗禪の一派である鴻仰宗の影響が強いように思われる。例えば後世の史料ではあるが、『釈氏稽古略』卷三にある乾寧元年（八九四）の項には、「高僧齊己は蜀人なり。幼に俗を瀉山の祐禪師に依りて捐つ。時に慧寂禪師、豫章の観音院に住む。己、庶務を總轄す。」（大正蔵四九・八四四・中）とある。この文は、齊己と鴻仰宗との間になんらかの關係があつたと考えられていたことを示唆するものだといえよう。また、『宋高僧傳』には「石霜の法會に於いて、請われて僧務を知す。」（大正蔵五〇・八九七・下）とある。ここにいふ石霜とは、『宋高僧傳』卷十二に立伝されている慶諸のことであろう。この人物は、青原行思系統の僧であるが、伝中に「廻りて南嶽に抵りて大瀉山に入る。」（大正蔵五〇・七八〇・下）とあるから、やはり、仰宗に關係のある人物である。

一方の鄭谷は、齊己以外にも虚中、尚顔といった詩僧たちとも交流がある。また、鄭谷は詩僧に限らず、僧侶全般に対して関心を抱いていた形跡がある。そのことが顕著にあらわれているのが、「自貽」詩（『雲臺編』卷下）の中の「琴に澗風有れば聲轉た澹く、詩に僧字無ければ格還た卑し。」という句であろう。ここでいうように、鄭谷の『雲臺編』中には「僧」を詠み込む詩は四十九首もある。その中で、とくに齊己との關係が広く伝わっているのは、主として「一字師」がよく知られているためであるが、齊己が鄭谷のためにつくつた詩には、仏教を通じた二人の交流を見

ることができる。

いま一例を挙げるならば、「寄鄭谷郎中」詩（『白蓮集』巻八）には「上國 誰か消息を傳えて過ぎん、醉眠醒坐して嗟峨に對す身 道士に離れて衣裳少なく、筆は禪師に答えて句偈多し。南岸の郡鐘 涼として枕を度り、西齋の竹露 冷やかに莎を露おす。還た應に我を笑うべし心外に降り、詩魔を惹得して佛魔を助く。」とある。この中で宮仕えの身である「道士」を離れたのは明らかに鄭谷である。この時期の鄭谷は仰山に隱居しているので、詩中に言う「禪師」とはその地にいる慧寂の禪風を受け継いだ僧であるろう。このような僧を相手にして、多くの句や偈を作るのであるから、鄭谷は仏教、なかでも禪に対しては比較的豊富な知識を有していたと考えられる。それに対して、僧であるはずの齊己自身は、皮肉にも詩を作るといふ行為が仏道修行の妨げとなる「仏魔」を生じさせて、僧としてあるべき姿を失っているというのである。この鄭谷の禪に対する興味は、都官郎中の職を辞した後後に生じたものではない。「省中偶作」詩（『雲臺編』巻下）に「直夜清間 且く禪を學ばん」といふ句があるように、宮中にいた時に既に禪を學ぼうとしていたあとがのこされている。

この禪と詩の関わりについては、齊己の「寄鄭谷郎中」詩（『白蓮集』巻三）に「詩心何を以てか傳えん、所證自ら禪に同じ。」という句があるように、肯定的にとらえているものもある。このように詩作の中に禪の考えをとり入れた形で詩論書としてまとめられたのが『風騷旨格』である。『風騷旨格』は一見すると「六詩」や「六義」といふ項目をたてており、従来の詩論書のスタイルを踏襲したもののように見えるが、「四十門」と「十勢」の二つに関しては齊己独自のものである。とくに「十勢」は、徐

寅の『雅道機要』などの後世の詩論書にも影響を与えた項目であるが、この「勢」の語源は張伯偉の『全唐五代詩格校考』「風騷旨格解題」に説明されている通り、『宋高僧傳』巻十二の慧寂伝の中の「若干の勢有りて以て學人に示す」といふ記述にある「勢」である。この語は贊寧によれば、「仰山の門風」を示す重要な語である。齊己が仰山慧寂の禪風を自らの詩論書である『風騷旨格』に取り入れたのだとすると、やはり齊己と鴻仰宗との間には深い関係があったと考えるべきであり、齊己と鄭谷とは単なる作詩上の師弟関係にあってただけでなく、「仰山の門風」を學ぶ同志でもあったのである。